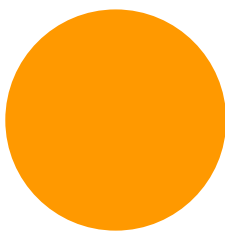
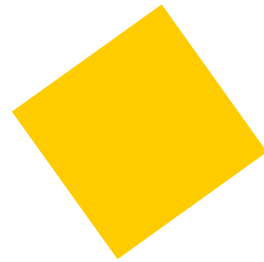
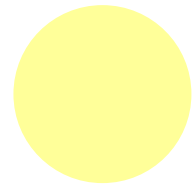


指導の手引き

言葉の豊かな育ちを支える 教育の推進に向けて



兵庫県教育委員会

はじめに

幼児期の教育は、その後の学校教育全体の生活や学習の基盤を培う役割を担っています。そのため、幼児期の教育においては、小学校以降の子どもの発達を見通した上で、幼児期に育てるべきことを幼児期にふさわしい生活を通してしっかり育てることが大切です。

幼児一人一人の可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていきます。そして、幼児は、環境との相互作用の中で、体験を深め、そのことが幼児の心を揺れ動かし、次の活動を引き起こしていきます。そうした体験の連なりが、幼児の体験の質を深いものにしていき、小学校以降の生活や学習においても重要な自ら学ぶ意欲や自ら学ぶ力を養うことにつながります。

本県では、このことを踏まえて昨年度、幼児期と児童期の「学び」の接続事業として、子どもの発達の特徴や幼稚園と小学校の指導方法の違い、発達や学びの連続性から見る教育の連続性・一貫性について共通理解し、体験の質の向上を図るための指導内容や指導方法の工夫改善を目的とする実践研究を進めてきました。その中で、学びの基礎力の育成に言葉や表現する力が大きな役割を果たしていること、また、学びの基礎力が育成されることで、言葉や表現する力も育まれていくことを確認しました。

言葉は、コミュニケーションや思考の手段として、日常生活の中であたりまえに使われていますが、生まれたときから言葉が話せるわけではありません。幼児は、言葉を話せない時から身近な人との温かいかわりの中でコミュニケーションの基礎を育み、豊かな体験を積み重ねる中で、言葉を豊かに育んでいます。

そこで、今年度は体験の深まりを通して、「言葉に対する感覚」や「言葉で表現する力」を育むための環境の構成や教師の援助のあり方を探る実践研究を推進してきました。

本冊子は、この研究の成果のまとめとして、言葉の豊かな育ちを支える教育を推進する一つの方策を示したものです。幼児教育機関においては、冊子を研修等で活用し、言葉の豊かな育ちを支える取組が一層推進されるよう心から願っています。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご協力をいただいた幼児教育「質の向上」支援委員会及び実践協力園の皆様に深く感謝を申し上げます。

平成27年（2015）3月

兵庫県教育委員会

もくじ

I	言葉の豊かな育ちを支える教育の推進にあたって	
1	幼児期の言葉の発達を支えるもの	1
	(1) 言葉が生まれるまでのコミュニケーション	
	(2) 教師との関係性の中で育まれる言葉	
	(3) 友達との関係性の中で育まれる言葉	
	(4) クラスという集団の中で育まれる言葉	
2	5つの体験から幼児の言葉の育ちを考える	3
II	研究の進め方	
	研究の基本	5
	5つの体験	5
	幼児の言葉の発達を捉える5つの視点	5
	PDCA サイクル	6
III	取組内容	
	研究のポイント	7
	○ 実践記録・分析	
	事例1 「根っこが抜けない」	8
	事例2 「どんぐりの転がる道、つくろう」	9
	事例3 「砂がビール飲んでる」	10
	事例4 「発射台が作りたい」	11
	事例5 「雷さまとしゃぼん玉が戦うんだ」	12
	事例6 「どんぐりのお散歩」	13
	事例7 「サンタさんがくるよ」	14
	○ 短期指導計画の反省・評価	15
	○ 長期指導計画の評価・改善	17
IV	まとめ	
1	豊かな体験を支える	19
2	環境の構成と教師の援助	20
	平成26年度幼児教育「質の向上」支援委員会委員名簿	21

I 言葉の豊かな育ちを支える教育の推進にあたって

1 幼児の言葉の発達を支えるもの

(1) 言葉が生まれるまでのコミュニケーション

言葉はコミュニケーションや思考の手段として、私たちの日常生活の中であたりまえに使われていますが、生まれたときから言葉が話せるわけではありません。

言葉は、乳児期の「叫喚発声」に始まり、「非叫喚発声」「喃語」「指さし行動」「表情」「身振り」等を通して、人とのかかわりの中で育まれていきます。

コミュニケーションは、乳児期の泣くという行為から始まっています。乳児は、お腹がすいたりおむつが汚れたりした時に、泣くことで周囲の注意をひきつけ、自分の欲求を伝えています。そして、母親等の語りかける言葉や微笑みかける姿を心地よく感じ、微笑み返すなどしてコミュニケーションをとっています。その後、共同注視（子どもの見ているものに母親等が視線を合わせること）や共同注意（母親等の行動に合わせて子どもの方が視線を合わせる）と指さし行動が見られるようになり、言葉で交わし合う関係が形成されていきます。

このように、言葉が生まれる前のかかわりが、幼児の言葉の育ちを支えています。

(2) 教師との関係性の中で育まれる言葉

幼稚園等での生活では、教師との信頼関係が基盤となって言葉の発達が促されていきます。

幼児は、教師の言葉や動きを見ながら、教師の言葉を学んでいきます。教師が大好きだから教師と話したい、という思いが対話へとつながっていきます。

また、幼児の動きや興味・関心に応じた教師の言葉がけで、幼児同士が同じものを見、楽しさを共有していくことで、友達同士の一体感を感じ、友達同士のつながりを深めていきます。

(3) 友達との関係性の中で育まれる言葉

幼児期の言葉は、友達との生活や遊びの中で、楽しんだり、悔しい思いをしたりするなど、感情を伴う体験を通して、言葉の意味を一つ一つ理解し、意味のある言葉として育まれていきます。

幼児の言葉は、2人のやりとりの中で育まれる言葉、3人以上のやりとりの中で育まれる言葉があります。

2人のやりとりでは、自分が相手よりも優位な場合、対等な場合、自分よりも相手が優位な場合によって、宣言する、自己主張する、同意を求める、相手を言い含める、相手に同意する、相手の思いを気にするなど、使われる言葉が違ってきます。

3人以上のやりとりでは、誰に向かって何を話しているのか分からなかったり、直接の話し手や聴き手にならなかったりすることもあります。そのため、それぞれの思いが理解できなかったり、一致しなかったりすることもあります。そこで、その意味を考えようとする力が、言葉のやりとりをつなげていくことになります。

また、相互にいろいろな意見を言い合いながら、納得した上で新たな方法を提案するなど、友達との遊びを展開させながら折り合いをつけていく中で言葉での交渉能力をつけていきます。

(4) クラスという集団の中で育まれる言葉

遊びや生活の中で友達とのやりとりを楽しむことができるようになると、生活や遊びを振り返って話し合ったり、友達と絵本や紙芝居等についても、思ったことや感じたことを伝え合ったりすることもできるようになります。

話し合う力は、幼児の発表する力ではなく、相手の立場に立って聴き取り、尋ねる力が育つことで、集団としての聴き合い語り合う雰囲気がつくられ、そのことによって、個々の幼児の聞く力も伝え合う力も育まれていきます。そのためには、伝えたいような活動と伝えたいような集団づくりを長期に見通して育てていくことが必要です。

幼児の言葉の発達を支えるためには、教師がそれぞれの幼児の声（言葉として発せられる声だけでなく、言葉にならない心の声や表情、身振り）を聴き取り、安心できるような関係や場、そして夢中になり没頭できる活動と場を幼児とともにつくるのが大切です。そして幼児の創造的な心が動き始めるのを待って応えるのが大切です。



2 5つの体験から幼児の言葉の育ちを考える

幼児は、教師や友達と一緒に行動したりやりとりをしたりすることを通して、次第に日常生活に必要な言葉が分かるようになります。また、幼児が絵本を見たり、物語を聞いたりして楽しみ、そこで想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを教師や友達と共有したりすることで、言葉に対する感覚や状況に応じた適切な言葉の表現を使うことができるようになります。

(1) 「なんで」「どうして」から育つもの

3年保育4歳児 7月

海遊びに浜辺に降りると、満潮で波の音が良く聞こえていた。「うあ、海キラキラしてる。」「ほんまや。きれいなあ。」「まぶしい。」と話しながら、午前中は生き物を見付けたり砂浜で遊んだりした。
帰るところになると、潮が引き、波の音もあまり聞こえなくなっていた。外に出て海を眺めていたA児とB児。
A児「あれ？波の声、変わった。」
B児「・・・」
T「へえー、どんなふうに変ったの？」
A児「うーん。海に行ったときは、ザザザーって言ってたけど・・・」
T「そうやね。なんか朝と違うよね。」
A児「うん。ザザザーって言ってないねん。きれいな声になった。」
B児「きれいな声になったん？」
A児「きれいになった。」
T「ほんまやね。確かにきれいになったね。」
B児はA児の言葉に耳を傾けている。

幼児は様々なものと出会い、新たな発見をしていきます。大人では見過ごしてしまう小さな世界に足を止め、「なんで」「どうして」と感じ、自分なりに追究する力を育てていきます。

このような体験の中で、思ったことや感じたことを、自分なりの言葉で表現しながら、言葉に対する感覚を深め、言葉で表現する力を養っていきます。

(2) 教師や友達とのおしゃべりから育つもの

3年保育3歳児 7月

いつものように教師と一緒に朝顔やトマトに水をやっていると
A児「先生、トマト見て。」
T「どうしたの？」
A児「赤ちゃんのんや。」
T「ほんまやね」
A児「こんな小っちゃいで。」と、小さい丸を指でつくる。
T「ほんまやね、小っちゃいね。」
A児「もっと、もっと大きくなってから食べるんよな。」と、両手でぐるぐるまわす。
T「そうやね。もっと大きくなってから食べるんよな。」と、同じように両手をぐるぐるまわす。
A児「あ、これとってもいい？」と、赤色のトマトを指さす。
T「赤色は食べられるからとってもいいよ。」
A児「こっちは？」と、黄緑色のトマトをさわる。
T「このトマトはまだやね。赤色のトマトをとってみよう。」

幼児は、教師や友達とのかかわりを通して体験を広げ、おしゃべりが盛んになります。おしゃべりしながら、互いの思いが通じ合う喜びや自分の知らないことが分かる楽しさを感じ取っていきます。

このような体験が、人の話を興味をもって聞こうとする意欲や態度につながります。

(3) 表現やごっこ遊びから育つもの

1年保育5歳児 10月

「わんぱくだんの忍者ごっこ」の絵本を読んだ幼児たちが、大型積み木でお城を作り始める。
A児は、B児が積み上げている積み木とは気付かず、積み木をとってしまう。とられたB児は「もう！とらんといてよ！」と、怒って泣きながら、A児がとった積み木を奪い返すが、A児も自分が使うと言って、1つの積み木の奪い合いが続く。

教師が「積み木をどんなふうにしたいの。」と尋ねると
 A児「窓にしようと思って。窓にしたら隠れてシュって手裏剣できるやん。」
 B児「お城の壁にして四角にしたい。」
 そのやり取りを聞いていたC児が、「そしたら、こっちからこっちは壁にして、ここに窓、作ったら？」と、積み上がった積み木を指さして言う。A児は「それがいい！」と笑顔で、B児は暗い表情のまま作り始める。しかし、お城が出来上がっていくにつれ、B児の表情が明るくなり、出来上がった窓から2人で手裏剣を飛ばして遊び始めた。

幼児は、日常生活の中で目にしたことや体験したことを遊びに取り入れながら、遊びのイメージを共有し、自分の思いを伝えたり、友達の話の聞いたり、協議したり、相談したりしながら、友達との関係を調整し、深めていきます。ごっこ遊びは、言葉を獲得したことで深められていく遊びですが、ごっこ遊びによってさらに言葉も後からも深まっていきます。

(4) 文化財との出会いから育つもの

認定こども園2歳児 7月

A児は絵本棚からいつも決まって食べ物載っている絵本を選び、大事そうに抱いて教師の所にもってくる。そして、教師に「・・・で。」と笑顔で手渡す。
 「一緒に読みたいのね。」と笑顔で返すと、りんごを指さしながら、はっきりと「りんご。」と話す。絵本の中に知っているものが出てくると、指をさしながら大きな声で、「ぶどう。」「みかん。」と話す。楽しそうな様子を見て、B児C児も「見せて。」とやって来る。
 すると、A児が絵本の中のりんごを両手ですくい、「どうじょ。」と、ゆっくり教師の口に運ぶ。ムシャムシャと食べて、「ありがとう。りんごおいしいね。」と笑顔で返すと、また、ぶどうを両手ですくい「どうじょ。」と、ゆっくり教師の口に運ぶ。ぶどうをムシャムシャと食べて「ありがとう。ちょっとすっぱーい。」と返すと、周りの子ども達がゲラゲラと笑う。
 この後しばらく、友達同士で『どうぞ』『ムシャムシャ』のやりとりが続いた。

幼児は、絵本を読んでもらうことが大好きです。絵本を開き、そこに出てくるものの名前を聞いたり、知っていることを伝えたりしながら、人とかかわりを深めていきます。また、絵本のイメージを共有する楽しさを味わいながら、言葉の意味を理解していきます。

幼児は絵本や紙芝居に人とかかわりながら親しむことで、言葉の音を繰り返すリズムの楽しさや、言葉の音の響きの楽しさなどに気付いていきます。このことが、言葉の感覚を豊かにしていきます。

(5) 心動かす事象との出会いから育つもの

2年保育5歳児 10月

園庭に落ちているイチヨウの葉に気付き、「ハートの形だ！かわいい。」「ウサギさんに変身！」と言いながら葉っぱを集めている。そのうち、手にあふれるほどたくさんになった。
 A児「わぁ、お花になった。」
 B児「ほんとうだ。きれーい！花束みたい。ねぁ、ほら見て、私のも。」
 A児「先生！見て見て、花束できた。」
 B児「私も。」
 T 「わぁ、きれいな花束やね。」
 C児「どれどれ見せて。」「私もやろう。どこにあったん？」
 3人は一緒に葉っぱを集め始めた。
 A児「黄色ばかりやから、赤が混じった方がきれいかもしれへん。」
 B児「ねえ、これあげる。きれいだよ。」
 B児はA児の声を聞き、自分が見つけた赤く色付いた桜の葉をA児に渡す。
 A児「ほんまや、赤どこにあったん？」
 B児は自分の持っている葉を見せながら「ね！いい感じでしょう。こっちにあるよ。一緒に行こう。」と、赤い葉っぱが落ちている場所へ移動する。

幼児は心動かす体験を通して、様々な思いをもち、この思いが高まると、その気持ちを思わず口に出したり、親しい相手に伝えようとします。このような体験を通して自分の気持ちを表現する楽しさを味わい、言葉で表現する力を育てていきます。

Ⅱ 研究の進め方

研究の基本

体験の深まりを通して「言葉に対する感覚」や「言葉で表現する力」が育まれるよう、PDCA サイクルに基づき、計画的な環境の構成のあり方や教師の援助を探っていきます。

- ① 各園の実態に応じた幼児の言葉の発達の過程を見通した教育課程の編成
教育課程に基づいた指導計画の作成
(言葉の豊かな育ちにつながる5つの体験が積み重ねられるようにする。)
- ② 指導計画に基づいた保育実践
- ③ 実践記録の作成・事例の分析
(言葉の育ちを捉える5つの視点から事例を作成する。)
(環境へのかかわりから、環境の構成・教師の援助を考察する。)
- ④ 指導計画の評価・改善

5つの体験

本研究では、幼稚園教育要領の領域「言葉」の内容を参考に、次の5つの体験が相互に関連したり、連続したりしていくことで体験が深まり、幼児の言葉の育ちにつながると考えます。そこで、指導計画の作成の際には、5つの体験が積み重ねられるよう計画していきます。(P3 参照)

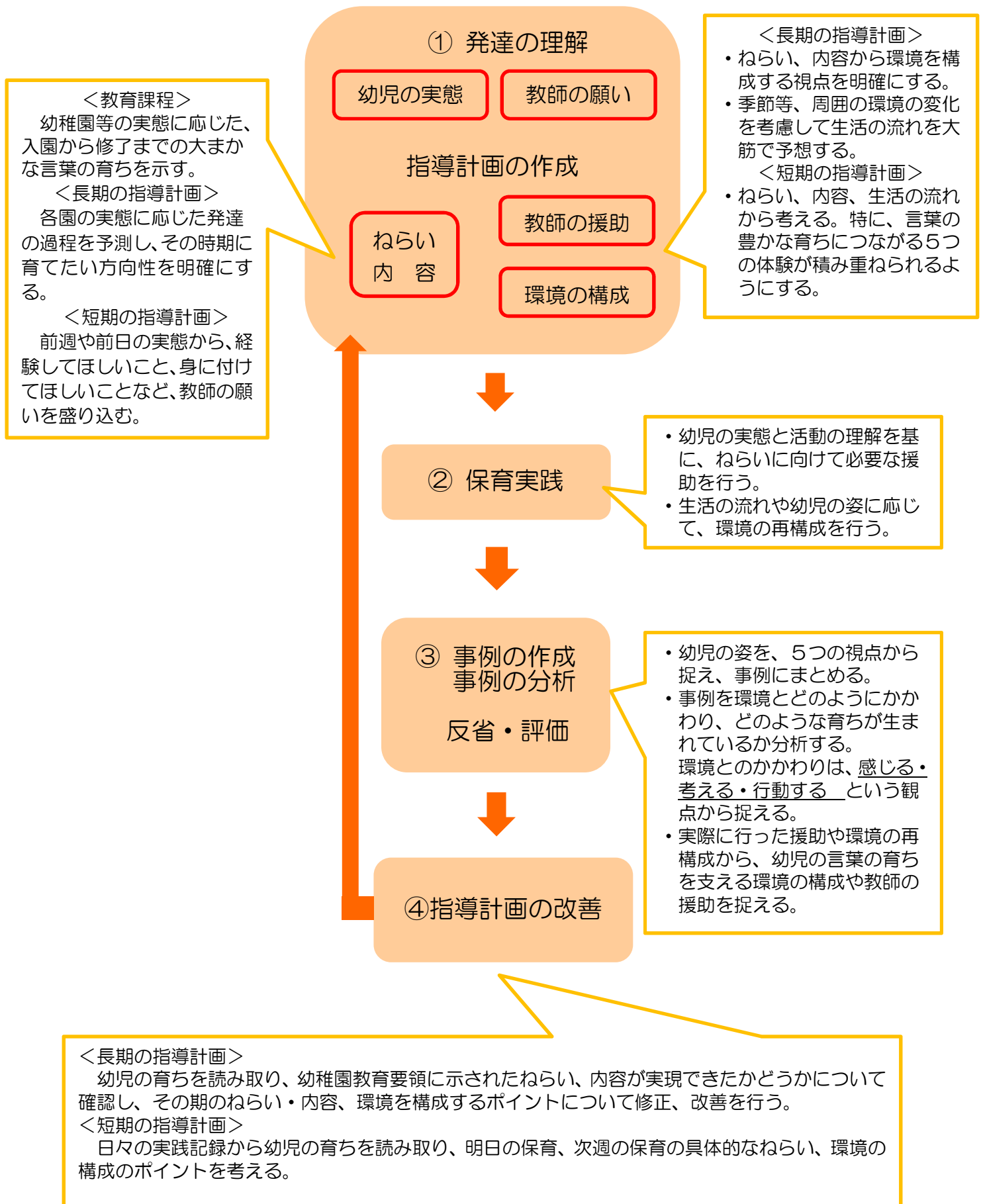
- 体験1 「なんで」「どうして」
- 2 教師や友達とのおしゃべり
 - 3 表現やごっこ遊び
 - 4 文化財との出会い
 - 5 心動かす事象との出会い

幼児の言葉の発達を捉える5つの視点

幼稚園教育要領の領域「言葉」に示された3つのねらい、10の内容を基に、幼児の言葉の育ちを次の5つの視点から捉えていきます。

- 視点1 興味・関心をもって教師や友達の話聞く。
- 2 体験や考えを自分なりの言葉で相手に伝える。
 - 3 いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにする。
 - 4 絵本や紙芝居に親しみ、想像する楽しさを味わう。
 - 5 文字で伝わる楽しさを味わう。

PDCA サイクル



Ⅲ 取組内容

研究のポイント

実践記録・分析

幼児期の教育は、環境を通して総合的に指導することを基本としています。言葉の豊かな育ちは言葉だけに焦点を当てて育まれるものではなく、いろいろな体験を通して育まれていきます。つまり、言葉は、体験と体験がつながり、関連していくことで体験が深まり、その深まりの中で豊かに育まれていきます。幼児が、環境と出会い、どのように感じ、考えているか、また、その環境とどのようにかかわろうとしているか、適切に捉えることが大切です。

「実践記録・分析」では、実践記録から幼児が環境とかかわる姿を、感じる・考える・行動するという観点から整理し、幼児の学びを捉えることで、幼児の豊かな言葉を育むための環境の構成や教師の援助を明らかにしています。

短期指導計画の反省・評価

「短期指導計画の反省・評価」では、日々の保育実践を振り返り、幼児の育ちを把握するとともに、経験してほしいこと、身に付けてほしいことなど、明日の保育の方向を明確にすることで、短期の流れの中で体験が連続・関連していくことが意識していけるようにしています。

また、短期指導計画のねらいに沿った指導を通して見られた幼児の姿からその週の育ちを見取り、ねらい・内容、環境の構成や教師の援助について反省・評価し、次週のねらい、環境の構成のポイントを明らかにしています。



長期指導計画の評価・改善

「長期指導計画の評価・改善」では、長期指導計画の中で捉えた言葉に関する学びを、「言葉」のねらいの視点から分類し、体験の積み重ねと幼児の育ちとの関係（体験の積み重ねの中で領域「言葉」に示されたねらいが達成できたかどうか）についての反省・評価、指導計画の修正・改善をどのように行うか考察できるようにしています。

事例1 「根っこが抜けない」 7月 3年保育4歳児 18名

視点1 興味・関心をもって教師や友達の話を聞く。

ねらい：砂場から出てきた藤の木の根っこを友達と考えを出し合って抜こうとする。

環境の構成：試したり工夫したりできるような用具を用意する。

友達と遊びの場を共有して遊べるようにする。

幼児の姿

体験①「なんで」「どうして」 体験②おしゃべり

砂場の中から横に植えてある藤の木の根っこが出てきた。「根っこだー。」というA児の声に、友達が集まるが、「僕のだよ、だめだよ。」と、みんなを追い払い、自分1人で抜こうとし始めた。しばらく様子を見ていたが、根っこはいつまでたっても抜けず、A児はだんだん元気がなくなってきた。

T 「抜けないね。どうしたらいいかな、誰か教えてあげて。」と、周りの子どもに声を掛ける。

B児 「いっぱい掘ったらいいと思うよ。」

A児 「うん、そうする。」しばらく1人で掘っていたが、やはり根っこは抜けない。

T 「A君、1人じゃ大変だね。どうする？」とA児に声を掛けると、やっと自分から「掘るの手伝って。」と周りの友達に頼む。

C児 「よっしゃー、頑張るか。」

D児 「みんなで掘ろう。」と、手で根っこの周りの砂を掘り始めた。しかし、なかなか根っこを抜くことができない。その時、

D児 「手じゃだめだ、ドリルがいるわ。」

E児 「そうだドリルだ！」

A児 「いいな、ドリル作ろう。」と、みんなはドリルになるものを探し始めた。

F児 「見て、これドリルみたいになった。」と、シャベルとジョウゴを組み合わせせて見せる。

D児 「ほんまや、ドリルや。」

A児 「これで掘ったら抜けるな。」

みんなでドリルを作り、また根っこの周りを掘り始めた。

教師の援助

環境へのかかわり

学びの広がり・深まり

砂の中に根っこを見付け興味をもつ。

1人で抜いてみたいという思いを受け止め、しばらく様子を見守ったがA児も1人では無理なことを感じているようだ。この後どうすればいいか考えるきっかけになるように声を掛ける。

根っこを自分1人で抜きたいと思い、興味をもった友達を遠ざける。

友達の考えを聞き、聞いたことを理解して試そうとする。

1人で根っこをカー杯ひっぱるが抜けず、どうしたらいいか考える。

友達の考えを聞き、1人で砂を掘ってみるが深く掘ることができない。

1人でやりたいが、1人ではできない現実を受け止め、自分の気持ちを整理し、困った気持ちを素直に表現する。

・友達に手助けを頼む。
・友達と一緒に掘るが抜けない。

手で掘るよりも、道具を使った方が効果的であることに気付く。

それぞれの考えが十分に試せる時間を確保したり、用具を用意したりする。

友達の新たな考えを聞き、ドリルを使って掘ることに共感する。

ドリルのイメージを共有して使い方を理解して試そうとする。

工夫してドリルを作り、ドリルを使って掘る。



興味・関心をもって教師や友達の話を聞くようになるためには

- ・ 幼児の思いを温かく受け止め、心の揺れを捉えながら、必要感をもって人の話を聞こうとするタイミングを逃さず援助する。
- ・ 友達とのかかわりの中で、発見や気づきが伝えられるような場を構成する。
- ・ 友達の話を聞いて試したり、さらに考えたりする時間を十分に確保する。

事例2 「どんぐりの転がる道、つくろう」 10月 1年保育5歳児 17名

視点1 興味・関心をもって教師や友達の話を聞く。

ねらい：いろいろな素材を組み合わせ、どんぐりが転がる道を工夫して作る。

環境の構成：幼児が組み合わせを楽しめるよう、様々な素材を用意する。

遊びの様子が他の幼児からも見えるような場所に、素材や用具を準備する。

幼児の姿

体験②おしゃべり

A児が牛乳パックでどんぐり転がしの道を作ろうと、コの字にした牛乳パックをガムテープでつなげている。そこへ、別の遊びをしていたB児がやってきた。

B児「何してるん？」

A児「道作ってるねん。」と、ガムテープを貼り続ける。

B児はしゃがみ込んで、A児に「どこからスタートするん？」と尋ねる。

A児は「ここからやで。」と牛乳パックの端を指すと、今度は、ストローを持って来て、どんぐり転がしの道の真ん中にストローをねかせて貼り、「こっちに行ったり、こっちに行ったりするんやで。」と指を動かしながら話す。

B児「じゃ、こっちに行くよって書いたら？」と牛乳パックの上を指でなぞる。

その言葉を聞いて、A児はしばらく黙って牛乳パックを見つめている。そして、「・・・そうやな。」とつぶやくと、マジックを持って来て矢印を描き始めた。

B児が「こっちにも書いて。」と言うと、A児が矢印を書き、あっという間にたくさんの矢印が書けた。

教師の援助

環境へのかかわり

学びの広がり・深まり

いろいろな素材を組み合わせることで楽しめるよう、いろいろな種類の素材を用意する。

牛乳パックを組み合わせ、どんぐりが転がる道を作る。

いろいろな素材の中から遊びのイメージに合う素材を選び、工夫して作る。

B児の提案をどのように実現させるのか、様子を見守る。

B児に自分のやっていることや、考えを伝える。

「こっちに行くよ」という言葉を、矢印で表現することに気付く。

2人のやりとりが十分に楽しめる時間を確保する。

「こっちに行くよ」と書いたらと言う友達の提案を聞き、文字の代わりに矢印で表す。

A児の考えがB児にも伝わり、分かり合って遊びを進めることを楽しむ。



興味・関心をもって教師や友達の話を聞くようになるためには

- ・ 友達の遊びに気づき、興味・関心をもってかかわれるよう、遊びの場や幼児同士をつなぐ。
- ・ 友達の話を聞き、自分なりに考えたことが分かり合え、一緒に遊ぶことが楽しくなる経験が積み重ねられるようにする。
- ・ 人とのかかわりが十分に楽しめる時間を確保する。

事例3 「砂がビール飲んでる」 9月 3年保育4歳児 8名

視点2 体験や考えを自分なりの言葉で相手に伝える。

ねらい：広い砂浜でのびのびと砂遊びを楽しむ。

環境の構成：自分の試したいことや、やりたいことが十分に楽しめる時間を確保する。
遊び仲間として幼児の遊びを一緒に楽しむ。

幼児の姿

体験⑤心動かす事象との出会い 体験①「なんで」「どうして」

久しぶりの海遊びで、砂浜ではお風呂づくりをしたり、砂山づくりをしたりするなど、それぞれがめあてをもって遊んでいる。

A児は最初1学期の海遊びで楽しんだ団子づくりをしていたが、隣でお風呂づくりをしていた友達が掘った穴に海水を入れたすと、その様子を興味津々で見始めた。

しばらく見た後、A児も仲間に入り、海水を汲んできてはお風呂の中に流し込み、泡立った海水が砂に吸い込まれていく様子を、またじっと眺めている。そして、その様子を見ながら、「ビール飲んでる。ビール。」「ビール飲んでる。」とつぶやく。

周りの子どもたちは、A児の言葉を聞いて、勢いよくもう一度海水を流し込んだ。

すると、A児は、海水が砂に吸い込まれ泡が残っている様子を見ながら、また、「ビール飲んだ。」とつぶやく。

A児は、流し込んだ海水が砂に吸い込まれていく度に、同じ言葉を繰り返した。

そこで教師が「誰がビール飲んだの?」と尋ねると、「ビール、口開けて飲んだの。」と答える。「砂がビール飲んでるの?」と、もう一度尋ねると、「うん!ビール飲んだ。」と笑顔いっぱい答える。

周りにいた子どもたちも、水を運ぶのをやめ、教師とA児の話に耳を傾けている。

教師の援助

環境へのかかわり

学びの広がり・深まり

友達とかかわりがもてるよう、教師も一緒に遊びに加わる。

1学期に楽しんだ団子づくりを楽しむ。

友達のお風呂づくりに興味をもち、仲間に入り、海水を運び流し込む。

友達の遊びに興味をもち、不思議に思ったことを繰り返し試す。

幼児のつぶやきに共感し、自分なりの言葉で表現する姿を温かく受け止める。

流し込んだ海水が泡立ち、砂に吸い込まれるのを不思議に思い、繰り返し試す。

海水が砂に吸い込まれていく様子からイメージしたことを表現する。

感じたことを自分なりの言葉で表現し、保育者とイメージを共有することを楽しむ。



体験や考えを自分なりの言葉で相手に伝えるようになるためには

- 友達の遊びに興味をもってかかわれるよう、教師も遊びの仲間になる。
- 幼児のつぶやきを逃すことなく捉え、自分なりの言葉で表現する姿を温かく受け止める。

事例4「発射台が作りたい」 9月 2年保育5歳児 10名

視点3 いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにする。

ねらい：本当に飛ばすことができる発射台を工夫して作る。

環境の構成：友達と一緒にロケットを使った遊びが工夫できるよう、友達の作った発射台を見る機会をつくる。

体験⑤心動かす事象との出会い 体験②おしゃべり

幼児の姿

A児は友達が作った発射台を見て、「自分たちも本当の発射台みたいに飛べるようにしたい。」と、グループの友達と一緒に、どんなふうにしたら飛ぶのか考え始めた。

A児が「ふうーって吹いたら、ロケットが飛ぶ。」と言うと、「吹いたら飛びし、いい考えや。」と、息（空気）を使ってロケットを飛ばそうと、ストローやラップの芯に息を吹き入れて、牛乳パックや空容器をくっつけた大きなロケットを飛ばそうとする。しかし、ロケットはびくともせず、「ロケット、全然飛ばへん。」と元気をなくす。他の幼児も「飛ばんなあ。」「ふうーってしたら、飛ぶのになあ・・・」と、飛ばないロケットを見ている。

そこで、教師が「本当だね。どうしたら、飛ぶのかな？何だったら飛ぶかな？」と声を掛けると、怪訝な顔をしながらも、ロケットを作るために用意していたペットボトル、プリンカップ、牛乳パック等の空き容器をストローやラップの芯の上にのせては息を吹き入れ飛ばし始めた。

すると、A児がペットボトルのふたをストローの上にのせ、息を勢いよく吹く入れると、ポンと飛びだした。「やったあ、やっぱり飛ぶんや！」と大喜びする。その様子を見ていた他の幼児も「小っちゃい方がよく飛ぶんやな。」「軽いから飛ぶんかな。」「じゃあ、この小さいゼリーのカップはどうかな？」など、軽そうなものを探してはストローやラップの芯の上にのせて吹き始めた。

いろいろと試す中で、吹き矢状に差し込んだ細いストローが一番飛ぶということに気付き、「これは、ストローロケットやな。」とニコニコ顔で話しながら、ストローの先に小さなロケットを作ってはり付けた。

教師の援助

環境へのかかわり

学びの広がり・深まり

試したり工夫したりしながら発射台が作れるよう、いろいろな素材や用具を用意する。また、安全に遊ぶことができる場所を確保する。

友達の作った発射台を見て、発射台に興味をもつ。

自分なりのめあてをもち、試行錯誤しながら、目的を達成しようとする。

本当の発射台みたいにロケットを飛ばしたいと思い、飛ばせる方法を考える。

息で飛ばす方法を考え、ストローやラップの芯に息を吹き入れてロケットを飛ばそうとするが、ロケットはびくともせず、どうしたらいいのかわからず、困ってしまう。

教師の話聞いて、再度考えたり試したりして、気付いたことを言葉で伝える。

何だったら息で飛ばせるのか、いろいろな空容器で試す。

ものの重さや形の違いで、息で飛ばすことができるもの、できないものがあることに気付く。

小さくて、軽いものだったら飛ばせることに気付き、よりよく飛ばす素材でロケットを作り直し、「ストローロケット」という名前をつけて、飛ばして遊ぶ。

新しいロケットにふさわしい名前を付け、友達同士でイメージを共有する。

これまでの経験から、吹いたら飛ばせると考えたが、ロケットの重さが飛ばない原因になっていることに気付かずにいる。飛ばない原因に気付けるよう声掛けをする。

いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにするためには

- ものとかかわりの中で何を感じ、何を考えているのか的確に捉え、温かく受け止める。
- 考えが行き詰まった時には、考えるポイントに気付けるような言葉かけをするなど、自分自身で解決できるよう支援する。
- 思ったことや考えたことをじっくりと試すことができるよう、時間や空間を確保する。

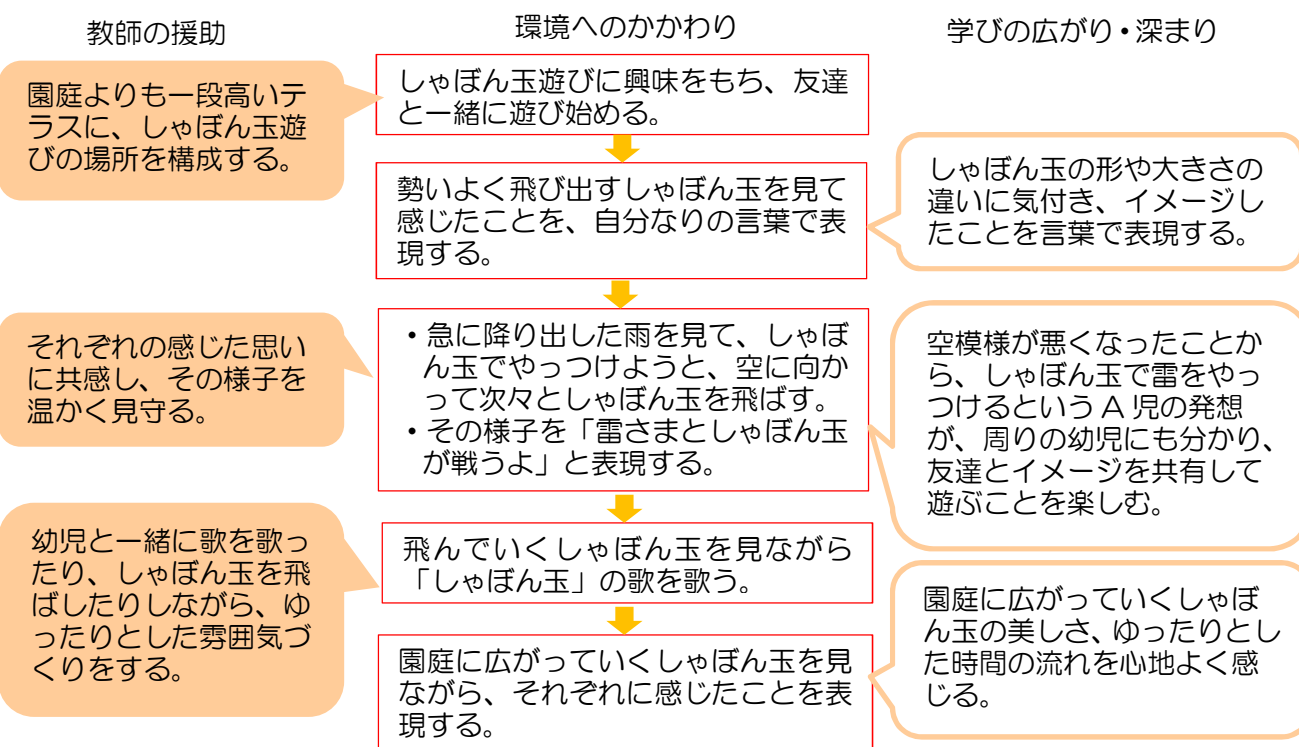


事例5 「雷さまとしゃぼん玉が戦うんだ」 7月 2年保育4歳児 17名

視点3 いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにする。

ねらい：友達と一緒にしゃぼん玉遊びをする中で発見したり試したりして遊ぶ楽しさを味わう。
 環境の構成：しゃぼん玉遊びに必要な材料や用具を準備し、しゃぼん玉が飛んでいく様子が他の幼児にも見える場所に遊び場を構成する。

<p>体験⑤心動かす事象との出会い 体験②おしゃべり しゃぼん玉遊びをしていると A児「うわ～いっぱいであー！」と、ストローから勢いよく飛び出すしゃぼん玉を見る。 T 「ほんと！すごいね。」と声を掛けると、ニコニコ笑顔でどンドン続けて吹く。 A児「大きいの一こっちゃいの。」と、飛んでいくしゃぼん玉を指さす。 B児「つながったのもあるよ。」 C児「雪だるまみたい。」と、側で一緒に見ていた子どもたちも指をさす。 B児「あっ雨ふってきた・・・!？」 少し空模様があやしくなってきた。 A児「雷さまとしゃぼん玉が戦うんだ！」 C児「みんなで吹いたら雨をやっつけられるよ。」 3人は、空に向かって次々としゃぼん玉を飛ばし続ける。すると、空が少し明るくなった。しゃぼん玉遊びはどンドン続き、しゃぼん玉が飛んでいく様子を見ながら「♪しゃぼん玉とんだ～」と、歌を歌い始める。 A児「夢みたーい。」 B児「しゃぼん玉の中に入りたーい。」 C児「うん、入りたいなあ。」「しゃぼん玉ばいばーい。」 B児「しゃぼん玉どこまでいくのー？」 A児「どこまでいってもいいんだよ。」 子ども達はしゃぼん玉でいっぱいになった園庭を見入っている。</p>	幼児の姿
---	------



いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにするためには

- ・しゃぼん玉遊びがより楽しめる場所を教師が把握し、遊びの場を構成するなど、豊かな体験ができるよう園内の環境をいかした遊びの場づくりをする。
- ・幼児の思ったこと感じたことを温かく受け止める。
- ・教師も仲間に入り、ゆったりとしたリラックスした雰囲気や心ゆくまで試せる時間を確保する。

事例6 「どんぐりのお散歩」 11月 2年保育5歳児 28名

視点4 絵本や紙芝居に親しみ、想像する楽しさを味わう。

ねらい：自分の思ったことや考えたことを絵で表現し、友達と伝え合って楽しむ。
 環境の構成：自由に絵がかけられるよう、絵をかくコーナーや材料を用意する。

幼児の姿

体験②おしゃべり 体験④文化財との出会い

A児が、先週作ったどんぐり人形を見て「お休みの間も元気だったかな。」「今日もお散歩に連れて行こうかな。」とつぶやいている。「どんな所にお散歩に行くのかな？」と教師が尋ねると、「お山とか公園に行くの。滑り台も滑るんだ。」と言う。A児は絵をかくことが好きなので、「絵にかいてお話にしてみたらどうかな？」と言うと、「うん！おもしろそう！」と、笑顔でマジックを用意し、家からどんぐり人形が出かけるところをかき始める。それを見ていた周りの友達も、「私もかく！」とA児の様子を見ながらかき始める。A児は「どんぐりさん、黄色い服を着てるの。髪の毛もあるんだよ。」「散歩に行くの。」と、どんぐり人形のお話であることを伝える。その話を聞いた幼児は、それぞれに太陽、空、どんぐりが木にぶら下がっているところなどをかき始める。

そこで話の展開のきっかけになればと思い、教師も風が吹いている絵をかく。それを見て、
 B児「風が吹いてるの？どんぐりが飛ばされるよ。」

A児「いいこと考えた！そしたらどんぐりが池に落ちることにしよう。」

B児「えー池に落ちるの？」と笑う。

A児「そう、ころころドボン！って。」

B児「おもしろい。」と、2人は大喜びする。

A児「そしたら、別のどんぐりさんが来て助けてくれるの。」

後から加わった幼児も

C児「雪が降ってきたことにしよう。」と、続きを考え、話に合わせた絵をかき始める。

教師の援助

環境へのかかわり

学びの広がり・深まり

A児の話が楽しかったので、A児が絵をかくことが好きなことも踏まえて、お話づくりを提案する。

自分で作ったどんぐり人形と一緒にどんな遊びをするか教師に話す。

- 考えたことを絵に表現することを楽しむ。
- 友達に自分の考えを分かるように伝えようとする。

まだ、お話としてつなげようという意識はないが、この先、お話としてつながっていくきっかけになればと思い教師も絵をかく仲間になる。

教師の提案に興味をもち、自分の考えたことを絵で表現する。自分の遊びに関心をもった友達に、自分の遊びを伝える。

興味をもった友達も加わり、それぞれにかきたいことをかき始める。

教師の絵を見て、感じたことを話しながら、話が続いていくことを楽しむ。

それぞれの考えに共感し、話が続いていく楽しさを一緒に味わう。

教師がかいた絵を見ながら、友達同士で感じたことや思ったことを伝え合う。

話の内容が友達同士で分かり合え、話の内容に合った絵をかくことを楽しむ。

お話を考え、話の内容にあった絵をかく。



絵本や紙芝居に親しみ、想像する楽しさを味わうようになるためには

- 絵に表現したそれぞれの思いを受け止め、共感する。
- 教師も仲間になり、一人一人の楽しさをつなげていく。
- 整ったストーリー展開を目的にするのではなく、それぞれの考えが分かり、友達とイメージを共有する楽しさが味わえるようにする。

事例7「サンタさんがくるよ」 12月 2年保育5歳児 21名

視点5 文字で伝わる楽しさを味わう。

ねらい：クリスマスごっこが楽しめる方法を考えて遊ぶ。

環境の構成：ごっこ遊びに必要なものを自分たちで用意できるように、いろいろな素材を使いやすいように整理して置いておく。

幼児の姿

体験③ごっこ遊び ④文化財との出会い

クリスマスパーティーごっこをしようと、役割分担をしたり、積み木やままごと道具を置いたりして、クリスマスパーティーごっこをする家を作る。

サンタクロース役のA児は、「プレゼントを入れる袋、作ろう。」と袋を作り、その横でB児が「じゃ、プレゼント作るね。」とモールや画用紙でアクセサリーを作る。できあがると、A児は袋にプレゼントを詰めて廊下に出て行く。C児は「トナカイになる。」と、A児と一緒に廊下に出て、ドアの隙間からお家の友達の様子を見る。

しばらくすると、B児が電気を消すが、家の中では子ども役の幼児がおしゃべりをしている。C児が「全然静かにならへん。」と、廊下で怒ったようにつぶやいた後、しばらく廊下で待っていたが静かにならないので部屋に入って行き、「静かにして！」と言うが、しゃべっている自分たちの声で聞こえないのか、C児の声に気付かずいつまでもしゃべっている。

その時、側で見ていたD児が、音楽会で使った『しずかにしてね』と書いてある看板をみんなに見せた。すると、みんなが気付いて急に静かになる。C児は笑顔で「もうすぐ来るよ。」と言い、D児と一緒に廊下に行き、トナカイ役をする。教師が「あっという間に静かになったね。」と声を掛けると、「よく見えるようにしたよ。」と、手を伸ばして看板を上あげた。その後、忍び足で部屋に入り、プレゼントを置いて戻っていくA児、C児、D児。それから、いろいろな幼児が看板を使い、看板が出ると静かになるというやりとりが続く。

教師の援助

環境へのかかわり

学びの広がり・深まり

遊びに使えるようなもの、遊びにいかしてほしいものを用意しておき、必要に応じて自分で選べるようにする。

役割分担をしたり、遊びに必要なものを用意したりして、クリスマスパーティーごっこをする家を作る。

幼児の困り感を受け止めながら、どのように考えようとしているのか見守る。

必要なものを作ったり、家でおしゃべりしたり、それぞれが自分のイメージで遊びを進める。

考えついた方法に共感し、上手くいったことを認める。

プレゼントを配りに行きたいが、いつまでもおしゃべりしていて眠らないので、どうしたらいいか考える。

騒がしい状態を静かにさせるのに、以前音楽会で使った『しずかにしてね』と書いた看板を使うといいかもしれないと気付く。

やりとりが十分に楽しめる時間を確保する。

「静かにして」と言葉で伝えるが、伝わらず困ってしまう。

『しずかにしてね』と書いた看板を使うという方法を思いつき、試す。

看板の文字が遊びの中でどのようなイメージなのか分かり、看板が出ると静かにして眠るというやりとりを楽しむ。

看板が出ると静かにして眠るというやりとりを楽しむ。



文字で伝わる楽しさを味わうためには

- 文字が示す内容を体験を通して理解できるようにする。
- 生活の中で、様々な文字環境にふれられるようにする。
- 遊びの中で、必要感を感じて文字を使おうとするタイミングを逃さず、発達に応じた支援をする。

短期指導計画の反省・評価

長期指導計画 9月 2年保育5歳児10名

- ねらい
- ・友達と一緒に体を動かして、進んで運動する楽しさを味わう。
 - ・友達と考えたり、工夫したりして一緒に遊びを進める楽しさを味わう。
 - ・友達と考えを伝え合い、分かり合って遊ぶ楽しさを味わう。
 - ・身近な自然にふれて遊び、夏から秋へ移り変わる変化を感じる。

短期指導計画 9月16日～9月19日

先週の幼児の姿

- ・竹馬や鉄棒等、自分なりにめあてをもって取り組んだり、しっぽとりやドッジボールなど、友達と一緒にやり方を考えながら遊んだりするなど、身体を動かして遊ぶ心地良さを感じ始めている。
- ・敬老の日に向け祖父母宛に書いた葉書が届くのを楽しみにしている。
- ・幼小交流活動「ペットボトルロケットを飛ばそう」の招待状をもらったことがきっかけとなり、自分たちもロケットを作り、できたロケットを投げて飛ばしたり、壊れたら修理をしたりするなど、作ったロケットを使って遊ぶことを楽しんでいる。

今週のねらい

- ・友達と一緒に戸外で体を動かす中で、めあてを見付け、進んで取り組む。
- ・友達と考えたり、工夫したりして遊びを進める。
- ・秋の草花や木の実等に興味をもち、調べたりかかわったりする。

環境の構成のポイント

- ・めあてをもちながら遊びが楽しめるよう、場の配置を工夫したり、ラインを引いたりする。
- ・ロケットや必要なものが作れるよう、扱いやすく、工夫できる素材を用意しておく。
- ・ロケットや宇宙に関連した写真等を掲示する。
- ・秋の自然物に興味をもって調べられるよう図鑑や写真を用意しておく。

幼児の姿

9月16日

自分たちで作ったロケットで遊んでいると、図鑑を見ていたA児が、ロケットの発射台を見せながら、「ロケットって飛ばす場所がある。」と知らせに来た。その話を聞いた他の幼児も図鑑を見ながら、「本当や。ここから発射するんやな。」「どうやって飛んでいくんかな?」「火が出てるよ。」「途中で、(部分的に)落ちるところあるんやで。」「と話すうちに、「発射台作れるかな。」「箱のできるんとちがうかな?」と廃材を探し始めた。A児は、牛乳パックを貼り合せて発射台を作ると、発射台に自分のロケットを置いて満足げにしている。

ロケットづくりの環境の一つとして図鑑を置いていたところ、A児がロケットの発射台に気付いた。A児の気付きに他の幼児も興味をもち、それぞれに感じたことや思うことを伝え合ううちに、A児は図鑑に載っているような発射台が作りたくなったようだ。A児が作った発射台はロケットを飛ばすことはできないが、図鑑に載っているような発射台が作れたことで満足している。新たに発射台ができたことで、発射台からどのようにしたら飛ばせるかなど、友達と考えを出し合いながら遊ぶ経験につなげたい。

9月17日

A児が作った発射台を見て、「発射台を作ってみたい。」「本当の発射台みたいに飛ばかなあ。」と他の幼児たちも興味を示したので、グループで作ることにした。グループごとにどんな発射台を作るかを相談していると、1つのグループがゴムの発射台を考えた。「牛乳パックをくっつけたらできる。」と材料を探したり、「ゴムをはしっこにはろう。」「飛ばすときはピーンとはったら飛ぶんじゃない?」と、グループの友達と一緒に試しながら作る。

1学期にゴムを使って製作をした経験から、ゴムを使ったら飛ばすことができると予想し、その方法を友達と出し合いながら試している。ゴムを使うという共通の経験があることで、それぞれが話す内容が分かり合え、作る工夫につながっている。ゴムを使って飛ばすことができたこのグループの発射台が他のグループの刺激となり、友達と工夫する楽しさにつなげたい。

9月18日

A児は、息（空気）を使って飛ばすという方法を考え、ストローやラップの芯に息を吹き入れて試していたが上手くいかず・・・事例4「発射台が作りたい」参照

それぞれのグループで発射台やロケットを飛ばす方法を考え、自分たちで作ったロケットを使って遊ぶ楽しさを味わっている。飛ばすことができるようになったことで、どこまで飛ばせるかなど新たな目的をもって、遊びを工夫できるよう、飛ばす楽しさをじっくりと味わわせたい。

9月19日

園外保育で地域に栗拾いに出かけた。年少児が、「どうやってとるの？」と尋ねると、昨年経験した年長C児が「イガイガの中に入っているよ。足で開くんや。」と答えた。また、年少児が栗のイガを見つけて戸惑っていると、C児が「やったるか。」と声を掛ける姿も見られた。次に、C児が「はじめって緑色？」と話すと、「緑の栗は開かないで。」と答えるD児。その後、緑と茶色が半々のイガを見つけたC児が、「これはどうかな？」と聞いてみると中に栗を見つけることができ、「やったあ！あった！」と声をあげた。周囲の友達も加わり、「茶色になったら、いいんやな。」「フウセンカズラと一緒にやな。」などと話しながら、栗を見つけて楽しんだ。

C児は昨年の経験から、年少児に自信をもって教えることができた。また、昨年は収穫の喜びの方が大きかったが、今年は栗のイガやイガの色の変化にも興味をもってかかっている。茶色になったら栗がとれるという事象が、フウセンカズラの種取りの経験と似ていたことで、「フウセンカツラと一緒に」という発言が聞かれた。このように、経験が自信となったり、発言の基となったりしている。

今週の幼児の姿

- ロケットに発射台があることに気付いたことで、発射台について興味をもって調べたり、友達同士で思ったことや考えたことを伝え合ったりしながら、工夫して作ろうとしている。
- 友達が工夫して作った発射台が刺激となり、ロケットを飛ばすことができる発射台を作ろうと、それぞれのグループで新たな目的をもって試行錯誤しながら発射台を作る。
- 工夫して作ったロケットや発射台を使って遊ぶ方法を、友達と相談しながら進めていこうとしている。
- 栗のイガの色の違いに気付き、色の違いで収穫できるかどうか判断し年少児に教えるなど、過去の経験をいかして遊ぼうとしている。

反省・評価

- 友達のロケットに関する写真や図鑑を用意したことや、友達の作った発射台を紹介したことが、ロケットづくりから本当に飛ばすことができる発射台づくりと、新たな目的をうみ、友達と考えたり工夫したりしながら遊びをすすめる楽しさを高めている。自分たちで作ったものを使って、遊びを工夫して進める楽しさを味わってほしい。
- 息を使って飛ばしたいというB児の考えは、最初なかなか上手くいかなかったが、友達と繰り返し試す中で、考えを実現することができた。自分の考えたことをじっくりと試すことができるよう、時間や空間を確保することが大切である。
- 1学期に経験した製作遊びや昨年の栗拾いの経験を、遊びに応じて自分なりに取り入れようとする姿が見られた。教師が過去に経験したことが今の遊びにどのようにいかされるのかを予想し、必要な材料や素材がいつでも使えるように用意しておくことも大切である。
- 栗拾いを通して、自然物に関心をもちはじめている。さらに興味を深めていけるよう、収穫したものを展示したり、関連した図鑑や絵本を掲示したりすることが大切である。

次週のねらい

- 友達と目的に向かって、相談しながら遊びを進める。
- 秋の自然物を自分たちの遊びに取り入れて楽しむ。

次週の環境の構成のポイント

- 気付いたことや考えたことを伝え、友達と共有できる場をもつ。
- 思ったことや考えたことをじっくりと試すことができるよう、時間や空間を確保する。
- 集めた自然物を目のつきやすいところに置いたり、興味・関心が深まるよう絵本を掲示したりする。

長期指導計画 12月 2年保育5歳児21名

- ねらい
- ・晩秋から初冬にかけての自然の移り変わりに興味をもち、経験や感動を豊かに表現する。
 - ・共通の目標に向かって協力し話し合ったり、認め合ったりしながら友達関係を深める。
 - ・絵本や童話に親しみ、その面白さが分かって想像することを楽しむ。

体験から言葉のねらいにつながる幼児の育ちを分類

言葉のねらい	自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう	人の言葉などをよく聞き自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう	日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ先生や友達と心を通わせる
幼児の育ち	<ul style="list-style-type: none"> ・サンタクロースのひげや服のイメージを自分なりの言葉で伝える。 ・クリスマスで知っていることを自分なりの言葉で伝える。 ・クリスマスの絵をかき、友達と見せ合いながら、絵からお互いの思いに気付く。 ・クリスマスパーティーに来てほしい気持ちを自分なりの文字で書き、招待状を作ろうとする。 ・朝の寒さ、風の強さ、息の白さなど、自然の変化に気付く、教師や友達に伝えたり、気付いたことを友達と一緒に試したりする。 ・音楽会で使った『しずかにしてね』の看板を遊びに取り入れ、サンタクロースがくる合図にして楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼントが入る袋の大きさを友達と相談しながら工夫して作る。 ・クリスマスツリーについて知っていることを伝え合い、お互いに納得する飾りを考えて作る。 ・自分の家のクリスマスツリーやクリスマスパーティーをした経験を友達と伝え合い、ごっこ遊びに取り入れる。 ・友達の遊びに興味・関心をもち、話を聞いたり質問したりしながら、遊びのイメージを広げる。 ・氷や霜からサンタクロースをイメージし、伝え合い、イメージを広げることを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クリスマスツリーの形のイメージを身ぶりを交えながら友達と伝え合い、形の名前や意味が分かる。 ・「ハモのクリスマス」を読み、静かな夜のイメージを共有し、友達と一緒にごっこ遊びを進めることを楽しむ。 ・クリスマスパーティーごっこで友達とのやり取りを楽しみながら、遊びに必要な言葉を知る。 ・サンタクロースに関する絵本を読み、サンタクロースの仕事に関心をもち、自分たちのごっこ遊びにも取り入れて遊ぶ。 ・学期末に向け、大掃除を友達と一緒にしながら、年の暮れに関心をもち、

考察

- ・身近な自然現象に気付き、さわったり試したりしながら、その感動や疑問を友達同士で伝え合い、分かり合える楽しさを十分に味わうことができた。そして、自然に触れて遊んだことが、その後のクリスマスごっこの遊びで、冬のイメージを豊かにすることにつながっていった。自然との触れ合いが他の体験とどのようにつながっていくか予想しておくことが大切である。
- ・幼児が楽しみにしているクリスマスのイメージは、幼児同士で共有しやすく、互いの意見を伝え合う中で、分かって遊ぶことを十分に楽しむことができた。また、遊びに必要なものを作ったり遊びを進めるのに必要な言葉を共有したりしながら、名前とものが一致し、言葉の意味を分かって使うことにつながっていった。〈P14 事例7「サンタさんがくるよ」参照〉
- ・友達と協力して遊びを進めることが多いこの時期のトラブルは、イメージの共有ができていないことから起こることが多かった。イメージが共有できるような話し合いの場づくりや、絵本等を使って共通理解を図るなどの支援が必要である。
- ・この時期になると、今までの経験から自分たちで遊びを工夫したり、問題を解決したりできるようになり、見守る援助が増えてくる。これまでの体験がつながり、深まっていくよう、何を育てるために見守っているのか意識することが大切である。

長期指導計画の改善

	改善前	改善後
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> • 晩秋から初冬にかけての自然の移り変わりに興味をもち、経験や感動を豊かに表現する。 • 共通の目標に向かって協力し話し合ったり、認め合ったりしながら友達関係を深める。 • 絵本や童話に親しみ、その面白さが分かって想像することを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> • 晩秋から初冬にかけての自然の移り変わりに興味をもち、経験や感動から遊びのイメージを広げる。 • 絵本や童話に親しみ、友達とイメージを共有して遊んだり、遊びを通して必要な言葉を理解し、分かって使ったりする。
内容	<ul style="list-style-type: none"> • 安全に気を付けながら積極的に体を動かして遊ぶことを楽しむ。 • 友達と考えを出し合いながら、遊びを進めていく。 • クリスマスや年末年始を迎える町並みや家庭の様子に関心をもつ。 • 友達と共通の話題について話し合い、自分の思いや考えを伝えたり、相手の話を聞いたり受け入れたりしていく。 • いろいろな楽器に親しみながら、友達と音を合わせることや演奏することを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> • 友達と共通の話題について話し合い、遊びのイメージを共有する。
環境の構成のポイント	<ul style="list-style-type: none"> • 寒い日でも戸外で遊ぶ機会を設けたり、戸外へ誘ったりして、思う存分身体を動かして遊ぶことができるようにする。 • 友達と考えを出し合って遊ぶ時間を十分設ける。 • 遊びの中で困ったりトラブルになったりした時は、自分たちで解決できるよう手助けやヒントを与える。 • クリスマスに関する絵本を読み、想像する楽しさを味わえるようにする。 • クリスマスについて話し合い、自分の知っていることを伝えたり、どんな飾りにしようか考えたりして友達とイメージを共有する機会をもつ。 • 遊びに必要な物を作りたい気持ちを膨らませたりイメージが実現したりするように、いろいろな素材を自由に使えるように出しておく。 • 歌ったり楽器を弾いたりして音を楽しむ機会を設けたり、自由に表現できるような空間を用意したりする。 • いろいろな楽器の音色や驚きを楽しみながら、友達と一緒に音を表現する楽しさが味わえるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> • 季節の移り変わりを感じられるように、氷や霜柱ができた機会を逃さずに幼児に伝える。(追加) • 遊びの中で困ったりトラブルになったりした時は、遊びのイメージが共有できるようにヒントを与えたり、話し合ったりしながら自分たちで解決できるようにする。 • クリスマスについて話し合い、自分の知っていることを伝えたり、飾り付けを考えたりするなど、これまでの経験をいかして遊びが進められるようにする。 • 歌ったり楽器を弾いたりするなど、自分なりのアイデアをいろいろな方法で表現できるような場を設ける。

Ⅳ ま と め

1 豊かな体験を支える

幼児期は、好奇心が旺盛な時期です。幼児は身近な環境に興味をもち、自分なりのやり方でかかわっていきます。このような幼児期の特性から、幼児期の教育は環境を通して行うことを基本としています。そのため、幼稚園等では、幼児の発達や興味・関心に応じた環境を構成し、発達に必要な体験が積み重ねられるようにしています。

言葉の豊かな育ちは、言葉だけに焦点を当てて育まれるものではなく、いろいろな体験を通して育まれていきます。つまり、幼児が環境と出会い、感じ、考え、行動し、また新たな発見や気づきが生まれ、考え、行動するという体験の巡りの中で、言葉が豊かに育まれていきます。

言葉の豊かな育ちにつながる豊かな体験を積み重ねるためには、教師はどのようなことに配慮すればいいのか、幼児の言葉の育ちを捉える5つの視点からまとめてみました。

興味や関心をもって教師や友達の話が聞けるようになるために

- 幼児は、自分の思いを受け止め、言葉や笑顔で返してもらうことで、分かってもらえる、受け止めてもらえる嬉しさを感じ、人との信頼関係を築いていきます。教師は、幼児が温かい雰囲気の中で生活や遊びを楽しめるようにしていくことが大切です。
- 幼児は教師や友達の話を聞き、新たな遊びに興味をもちたり、新しい考えが浮かんだりして、体験を広げていきます。幼児の興味・関心を捉えた話題、思わず聞きたくなる話題を探るとともに、教師の投げかける言葉がきっかけで、どのような考えを巡らせていくのか意識し、一人一人の育ちにつながる言葉を掛けることが大切です。

体験や考えを自分なりの言葉で相手に伝えられるようになるために

- 幼児は遊びながら感じたこと、考えたことを素直につぶやきながら、動きや情景を言葉にすることを楽しんでいます。そのような幼児の素朴なつぶやきや思いを温かく受け止め、共感したり一緒に考えたりすることで、伝えたい気持ちを育てていくことが大切です。
- 幼児は友達と一緒に遊びながら、どうしても伝えたいことを伝えようとしたり、伝わらないもどかしさを乗り越えようとしたりする中で、自分なりの言葉で伝えようとする力を育てていきます。教師はその過程を適切に支えていくことが大切です。

いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにするために

- 幼児は、体験を通していろいろなことを感じ、心の中にため込んでいきます。これが、イメージや言葉のもととなります。そのため、幼児だけでなく、教師もまた豊かな感性をもつことが必要です。教師は、人やものとかかわる体験、文化的な体験等、幼児の心に残る体験との出会いを逃すことがないよう、常にアンテナをはりめぐらせていることが大切です。
- 教師も幼児と一緒に体験を楽しみ、幼児が感じていること、楽しんでいることを理解することは、幼児の豊かな体験を支えることにつながります。

絵本や紙芝居に親しみ、想像する楽しさを味わえるようになるために

- 絵本や紙芝居は、大切な文化財です。幼児が様々な心情体験できるような絵本や紙芝居に積極的に出会えるように、教師自身が絵本や紙芝居にふれ、絵本や紙芝居の豊かさや可能性、作品の特色を捉え、幼児の興味・関心や発達に応じた作品を用意することが大切です。

文字で伝わる楽しさを味わえるようになるために

- 幼児は生活の中で、様々な文字にふれ、知らず知らずのうちに文字に親しんでいきます。教師は、幼児の目にふれる表示等において、丁寧で美しい文字を書くなど、正しい文字に出会える環境を工夫していくことが大切です。
- 文字に対する関心の度合いは個人差があります。遊びの中で、一人一人の実態に応じ、その幼児なりの表し方を温かく受け止め、遊びを通して育てていくことが大切です。

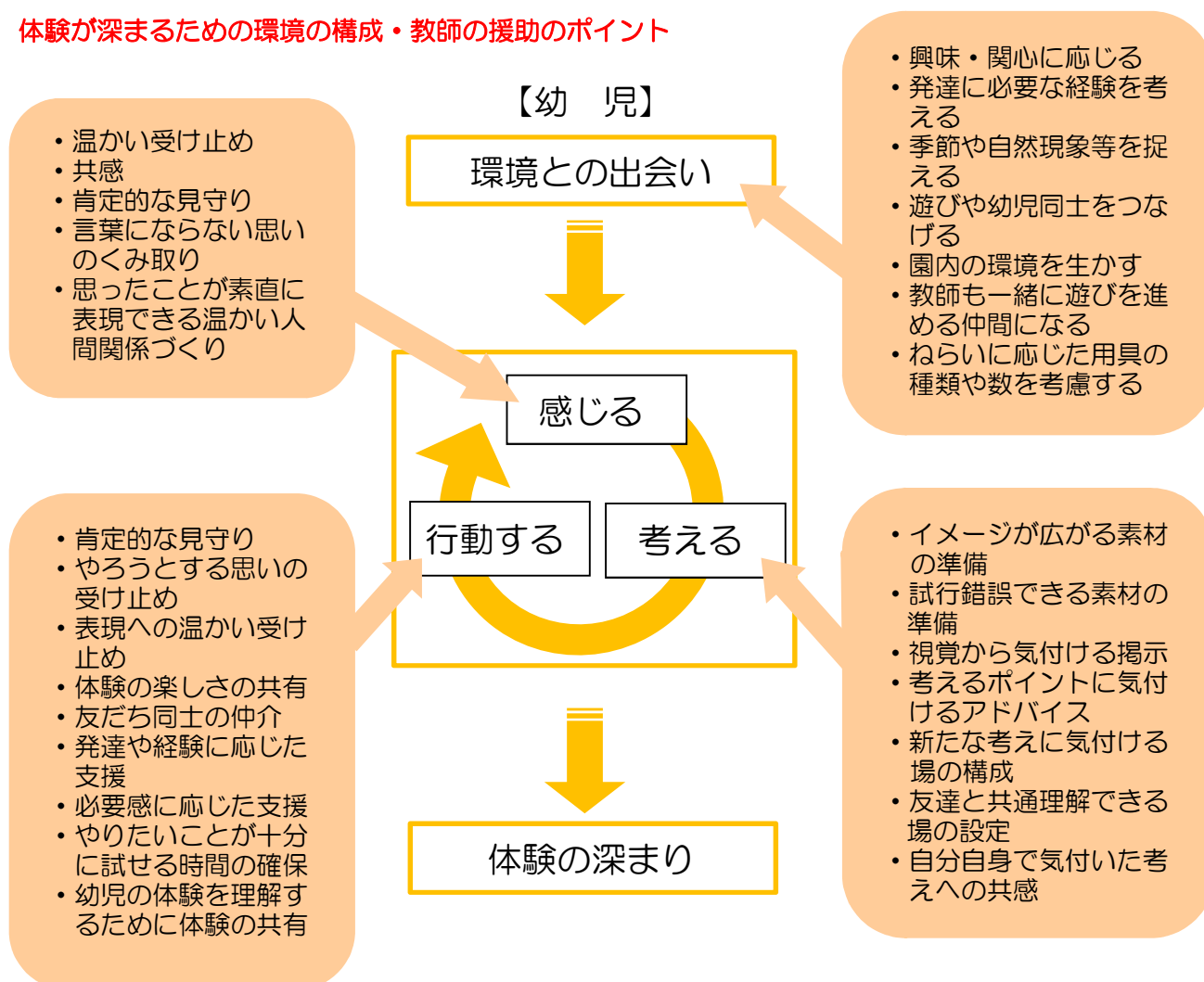
2 環境の構成と教師の援助

実践協力園の実践記録を分析する際、幼児と環境とのかかわりを、感じる、考える、行動する、という3つの観点から整理してみました。その整理から、幼児が感じた時、考える時、行動する時、その時々が環境の再構成や援助をするタイミングになっていることが分かります。

教師が行った援助を大きく2つに分けると、見守る援助と何らかのアクションを起こす援助があります。その際に重要となるのが、確かな幼児理解です。

教師は幼児の発達やこれまでの経験、興味や関心に基づき、何を見守るのか、何を体験させるためにアクションを起こすのかなど、常に目的を意識しておくことが大切です。また、その援助が幼児の育ちと照らし合わせてどうだったのか反省・評価することが、豊かな体験につながっていきます。

体験が深まるための環境の構成・教師の援助のポイント



幼児教育「質の向上」支援委員会委員名簿

構成	所属	職名	氏名
学識経験者	兵庫教育大学大学院	教授	名須川 知子
	神戸親和女子大学	教授	矢野 日出子
幼稚園長会 関係者	兵庫県国公立幼稚園長会 神戸市立神戸幼稚園	園長	大西 眞弓
実践協力園	猪名川町立つつじが丘幼稚園	教諭	繁澤 淳子
	加古川市立平岡東幼稚園	教諭	久田 江利佳
	たつの市立東栗栖幼稚園	教諭	中山 眞美
	新温泉町立浜坂認定こども園	総括主任	井上 玲子
	丹波市立中央幼稚園	主任教諭	大槻 紀子
	南あわじ市立 丸山・阿那賀・伊加利幼稚園	主任教諭	野田 ゆかり

指導の手引き

「言葉の豊かな育ちを支える教育の推進に向けて」

平成27（2015）年3月発行

編集発行 兵庫県教育委員会